
桜から繋がる奇跡へ

篠 隼鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜から繋がる奇跡へ

【Nコード】

N3071BA

【作者名】

篠 隼鷹

【あらすじ】

来須学園の合格を確認したとき、つい涙があふれた。そんな羽鳥に近づいてきた少女。少女の正体は――？

よく晴れた寒い朝。そろそろ三月だというのにまだまだ春は遠い。桜についたつぼみもまだ小さい。

白い息を大きく吸い込み、吐き出して。緊張で震える手をぐつと握りこむ。

癖のない髪が風に吹かれて揺れた。黒い瞳が掲示された番号を滑って行く。

今日は私立来須学園の合格発表の日だ。この場には羽鳥だけではなく、周りに中学生が群がっている。

掲示される時刻より三十分前に着いたというのに、そこはすでに黒黒黒くろクロ…黒一色。日本人の特徴である黒髪で溢れ返っていた。

この人数の多さで「来須学園」の人氣が窺える。

数百人の受験者の中で己の番号を探すがなかなか見つからない。

羽鳥の受験番号は「83」。83……やみ、「闇」を連想してしまつて、あまり嬉しくない。それどころか、不吉過ぎでこの進学校には受からないのかもしれないと諦めすら感じた。

中学三年生に上がった当時の自分の成績は芳しくなく、偏差値40を少々過ぎたくらいだった。進路調査で第一志望に書き込み、三者面談で担任が出した溜め息は今でもよく覚えている。

「お前、本気か？」といったムードだった。

仕方がないのかもしれない。この高校の偏差値は65。40そこらの羽鳥から見ると高すぎるハードルだった。

そのことは自分が一番よく分かっていた。だが、変えたくはなかった。この高校選んだ理由が不純なものであっても諦めたくはなかった。

友人と遊ぶ時間を減らし、睡眠時間を削り、分らないところがあれば教師に質問して苦手を徹底的に潰していった。

努力、努力、努力努力努力！！ の繰り返し。

その努力は――

――実った。

自分の受験番号を発見した瞬間、見間違いかと思つて何度か目をこすった。何度も何度も見た夢ではないかと自らの頬をつねれば痛みがある。夢でも幻でもない。本当の自分の番号だ。

塾や予備校のCMで、大学受験に合格した高校生がよく胴上げされて祝福されるが、常に白けた気持ちで見っていた。

それが、今理解できた気がする。想像の中では自分は今胴上げの最中だ。感極まって目頭が熱くなってきた。そのうちぼろぼろと涙が滝のように零れ落ちてきた。

口を半開きにして呆然とする。涙は止まる目途が立たない。その場にいた合格発表を見に来た中学生たちは羽鳥を見て何を思ったのか、本人に聞こえないようにひそひそと話を始めていた。

「そんなに泣いて、どうしたんだい」

少し離れて立っていた中学生――足首まであるコートを着ていて、どの学校かは分からなかった――が隣に歩み寄つて羽鳥の顔を覗き込んだ。

身長は178を少し越えたくらいだろうか。羽鳥より身長が高かったが、顔を見て驚いた。

——女子生徒だった。

確か、来須学園は男子校のはずなのだが……。全体的に色素の薄い塊で、印象はやわらかく、疲れた精神を癒してくれそうなやさしい雰囲気だ。

小顔で、華奢で……。顔はなぜか自宅のまめ柴を彷彿とさせた。

首に少しかかるくらいのショートヘアは顔が丸味を帯びて見える。薄茶の髪は茶柴の色と似ていて、なんとも愛らしい。これでもう少し身長が低くて、声がもう少し高ければ——見た目よりかなりハスキーな声なのだ——、男はいちころだろう。

その女子はなぜか同情したような表情でこちらを見ている。羽鳥には理由が思い当らず、止まらない涙はそのままにして首を軽く傾げた。

「……この学校、結構難しいからね。落ちたのは残念だけど、きつといい経験になるよ」

——「落ちた」？

非常に残念そうに言われた。親と離れ離れになった力みの雛のように、それはそれは極端に寂しそうに涙ぐんで言っている。

言われて周囲を見回してみると、泣いているのは自分一人。そして、気付いた周囲の視線。先程から感じていたこの視線は「かわいそう」なものを見るものだったのだと理解した。

「俺、落ちてないよ。受かったんだ、……………一応」

三年に上がった当初のあの芳しくない成績からくる自信のなさは仕方ないだろう。たった一年でここまで成績が良くなったとは、自分でも奇跡としか言えない。

涙を手で擦ってぬぐい、今度は逆方向に首を傾けて話すと、女子生徒は目を見開いて頬を薄っすら赤く染めた。

「きみ、かわいすぎるよ……………」

俯いて表情を隠そうとしているのか、顔を下に向けてもごもごとと呟いた。小声でよく聞き取れなかったのだが、あまりいいことを言っているふうには思えなかった。

「そうか、受かったんだ…。じゃあ、四月が楽しみだね」

そう言っでぐっと近寄ってきた顔に驚く。目の前でにっこりと微笑まれた。可憐な少女の頬笑みをこんな間近で見られるのはそうそうないだろう。

少女はそつと羽鳥の真黒な髪に指を通して、梳いた。数回撫でて離れると、「じゃあね」と言っで去って行ってしまった。

少女を見送ると、ふと疑問に思った。

彼女が歩いて行った方向は、学園の敷地内だった。

人生最大の誤算。そんな言葉が似合う初登校。自分のクラスの戸の前で止まる。緊張で手が汗ばむ。心なしか目が潤んでいる気がする。

クラスは親友二人と同じだ。それだけ見れば先行きが明るそうだが、全くそんなことはないのが現実だ。

深呼吸を数回し、両手で頬を叩く。気合を入れて引き戸に手をかけた。

開けた瞬間、黒板の近くで立っていた生徒が振り返った。

「よう、羽鳥！」

羽鳥に向かって手を振る一人の男子生徒。

「クラス分け見たとき、びっくりしたよ」

そしてその隣に立っている男子生徒が振り返る。

小・中と同じ学校に通い、何度かクラスも同じになったことのある二人。

手を上げて呼んだのが坂本環。さかもとたまき縦はかなり大きく、横は筋肉がよく付いたスポーツマンタイプ。顔もそこそこ整っている。

首を傾げて苦笑しているのは宮前光太郎。雪のように白い肌と、見つめられると固まってしまうほど冷たい黒眼。だが、少し跳ねた染めたことのない癖っ毛のおかげか、印象は眼ほどきつくはない。

この二人は中学三年で同じクラスになり、同じ高校へ行こうと誓い合った仲だ。

羽鳥は内心複雑だったのだが――。

二人のもとへ近づいて行く間、緊張で身体が潰されそんな感覚が強くなった気がする。

「俺もびっくりした。なんで俺、一組なんだよ……」

教室に入る前――入った後もまだ続いている極度の緊張はこれが起因だ。学生玄関の前に掲示されていたクラス分けを見て驚愕し

た。一組だったのだ。

この高校はクラスの組が若いほど頭の出来がいいのだ。中学三年当初の偏差値は、担任の教師に嘆かれたくらい悪かったのだ。それが一組に入るまで入試で点数を稼ぐとは。

「……信じらんねえよ……」

既に潤んでいた目の端から涙が落ちそうだ。きっと点数はこのクラスで一番悪いのだろうが、何の因果か一組だ。最低点だとしても一組なのだ。がつくりと肩を落として溜め息が出た。

……これからの授業について行けるだろうか……。

「この一年間、羽鳥の気迫凄かったもんなあ……」

「担任も、三年になった途端に勉強熱心になったお前見て、目ん玉落ちそうなほど驚いてたっけ」

「運が良かっただけだろ。俺、これから先どうしよう」

二人は懐かしそうに物思いに耽っているが、羽鳥にとってはこの先のことが不安でたまらない。本当は「幸運」ではなく「悪運」が羽鳥に付きまといっているのかもしれない。

落ちこぼれなのが虚しくてたまらない。環と光太郎は中学校でもずば抜けて成績の良かった二人だ。このクラスでも成績は上の方だろう。

「勉強なら俺たちが教えてやるって！ それにあんなに頑張ってたじゃねえか。きっとこれからも頑張れるって！」

羽鳥の背中を力いっぱい叩く環に同意して、光太郎も頷いた。

中学の同級生たちは、急に勉強熱心になった羽鳥をからかうものや、成績の悪い羽鳥のことを「三日坊主で終わる」「努力しても無駄」と嘲るものまでいた。

だが環と光太郎は違った。

羽鳥が分からないところを質問すれば熱心に応え、自習の時間は三人集まって勉強し、予定が合えば家に集まって勉強会をした。

こんなに親身になってくれた親友二人には感謝してもしきれない。「ありがと……」

「泣き虫だなあ、羽鳥は」

苦笑して光太郎が羽鳥の真黒な頭を撫でた。

感受性が強いせいか、再び眼が潤んできた。

映画館だろうが、喫茶店だろうが、公の場においても何かあるたびに声が震えてしまう。だからと言って、精神や、肉体が弱いというわけでもない。

この一年の努力を続けられたタフさや、学校で一番と言われた運動神経の持ち主だ。

本人は知らないが、羽鳥の涙もろい性格は容姿と相反して親近感が湧く。周囲のだいたいの人間は、この性格は羽鳥のチャームポイントと見ていた。

羽鳥の容姿——身長はすでに伸び悩んでいるが、それ以外の部分はその辺にいるモデルよりも整っている。

中学校では、王様は環、女王は光太郎、王子は羽鳥と呼ばれていくらい人気者で、密かに思う人間は男女問わずかなりいた。

すらりと伸びた長い手足、ピアニストのように長い指、襟足にかかるベルベツドのような艶やかな髪。きりつとした切れ長の目、大きめの黒い瞳。運動神経がいたため、適度に筋肉もついている。

典型的な日本人らしく堀は深くないが、日本人形のように整っている。

どれを取っても非凡で、老若男女問わず、振り返って感嘆の息を吐くほどだ。

共学だった中学校では、ひと月に一回は女子に告白されていた。

だが羽鳥はいつも断っていた。「きみには何も感じないから」が常套句で、常に何かしらときめきというものを探していた。

「そんなものを感じる時にはすでに爺さんだ」

「付き合ってみれば意外と何か感じるかもしれない」

というのが親友二人によく言われる言葉だ。「好きも嫌いも何も感じない人と付き合うのは失礼だ」と羽鳥は思っており、二人の言葉は参考にもされない。

運命の人など信じているわけではないが、羽鳥は特別だと思う人物が極端に少ないのだ。

家族は「特別」の中に入るのは当たり前だが、あとはこの親友二人しかない。他の友人と不仲だったわけではないが、ある程度話せればそれでいいとしか思っていないのだ。

このような人間では、血も涙もない冷血漢のように思われそうだが、感受性の強い性格を見れば分かるように、そんなことはない。事件や事故は一般人と変わらない程度の興味はある。毎朝の占いも人並みに気になる。ペットだった先代の柴犬が死んだときは一人でこっそり泣いた。

平凡な生活を送り、山も谷も感じにくい日常。羽鳥はその感じ方が極端なほど振れ幅が少なく、平坦なのだ。

どこか「特別」に淡い期待を寄せ、そうして普通ではない「努力」で手に入れた高校生活。

これからの生活が楽しみで仕方がない。

今日がその楽しみな日々へと続く門出。あまり期待しすぎてバカを見るかもしれないが、それでもいいと思えるくらい胸が膨らむ。

——そして、気になることが一つ。

周囲に気を配らない羽鳥が、この高校へ来て初めて興味を持ったもの。それが合格発表の日に見かけた女子生徒。

女子なのだからこの高校にいるなんてことはないだろうが、ずっと気になっていた。もしかすると、この高校に肉親がいるのかもしれない。

羽鳥が初めて女性に興味を持った存在。彼女が、「特別」の候補かもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3071ba/>

桜から繋がる奇跡へ

2012年1月8日01時52分発行